完全型円板状半月損傷に対する半月縫合温存手術の短・中期成績

○山田　裕三[1)]，中田　　研[2)]，前　　達雄[2)]，金本　隆司[2)]，史野　根生[3)]

[1)] 守口敬任会病院　スポーツ整形外科
[2)] 大阪大学　整形外科
[3)] 大阪府立大学　総合リハビリテーション学部

【目　的】

完全型円板状半月損傷に対する縫合温存手術の術後中期成績を調査し，有用性を検討する．

【対象と方法】

外傷による膝関節痛やひっかかり症状が持続し，MRI，鏡視にて外周辺部の縦断裂で体部に変性がない症例に半月縫合温存手術を施行した．外周辺部の縦断裂に自己末梢血 fibrin clot を用いて，鏡視下 stacked-suture を行った．2002 年以降，円板状半月損傷手術治療 134 膝中，縫合温存手術を施行した完全型円板状半月 9 例 11 膝は，手術時年齢は 6 歳～ 22 歳（平均 14 歳），術後観察期間は 15 ヶ月～ 4 年（平均 2 年 8 ヶ月）である．

【結　果】

疼痛は 11 膝中 10 膝で消失し，ひっかかり症状は 10 膝中 9 膝で消失した．伸展制限は 4 膝中 3 膝が消失し，外側関節裂隙圧痛と McMurray test 陽性は 11 膝中 10 膝で消失した．池内スケールによる総合評価では excellent は 9 膝，good が 1 膝で，fair が 1 膝であった．fair 1 例は IKDC activity Ⅰであり運動時疼痛が残存し，術後 9 カ月再鏡視で縫合部の治癒不全を認め切除術を施行した．単純 X 線で骨棘形成や離断性骨軟骨炎を認めた症例はなく，MRI で新たな半月体部の変性を認めた症例はなかった．

【考　察】

円板状半月損傷に対し大腿－脛骨関節が円板状半月を介して適合していると考え，体部に変性がない例で形成切除は追加せず損傷部を縫合し温存した．11 膝の 15 ヶ月～ 4 年（平均 2 年 7 ヶ月 9）成績はスポーツ活動性が高い 1 例を除き良好であり，適応を慎重に選択すれば円板状半月損傷の手術治療の選択肢としての可能性がある．